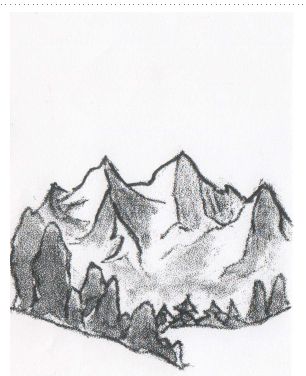

一部50円です



山の境界線

炭焼きや植林が盛んだった頃、山道を歩きながら母は「ここがうちと隣の境界線らしい。そのヒノキが目印だとお爺ちゃんが言うのってちやうど」続けて「隣の山の持ち主の〇〇さんは、欲の深い人で植林するたびに少しずつうちの山際に入り込んで植えてやさかいかなん。うちが目印に植えた木を植えかえちやうどしたこともあるらしい」などと口癖のように言っていた。祖父や父からはそんな話は聞かなかった。子供である私に話しても仕方がないと思っていたのだろう。

吉野の山では境界線が空地にしておく風習があるらしいが、私の村では目印になるものは岩であったり木であったりしたのである。一つの山に多くの持ち山が点在しているから山になれた古老でなければ境界線を知る人はいない。山は裾から稜線まで長いので少し境界を変えただけでも大きな地面になる。

小さな村であるから、山の持ち主とは親しい間柄なので、たとえ境界線が入り込んで来られても面と向かってなかなか抗議はできない。先方もその事を先刻承知で代々にわたってしてくる。しかし、父などは人の良い性格か気の弱い性格だったのか、母が「あの家は、ほんまに欲深い…」などとぼやくと、父は「ええやないか、ちょっとくらい」と言いながら取り合わなかった。山の境界線は公図によって所有者が決められていて、勝手に変えることは出来ない、たとえ違っていても、いらぬ争いごとを起こして日々の生活に支障をきたすより見て見ぬふりをしたのだろう、

時代が変わった今、誰も山へ行かなくなった。価値が無くなったのだ。境界線など気にする者はいないに違いない。村の変遷を見ていると、土地の所有にこだわり、いがみ合いをして我欲を突っ張っていた人は、ほんの一部で大方の人は穏便に過ごしてきたのだ。元々、土地は誰の物でもない。どこかから移り住んできて自分の領地と言っただけなのだ。土地を子孫代々受け継ぐ権利など本当は疑わしい。金儲けに山が関係していた時、人は欲得に呆けてわずかばかりの土地を得るために境界線を少しでも移そうとした。悲しいかな目先の欲得にとらわれる人の業は無くなることはない。隣国との国境線を巡る争いを見ても、また境界線の亡霊が勢いを増して我々を脅かしている。(嘉)

新連載

死をめぐるあれやこれ(1)

「九相図」

石川 吾郎

一年の中で八月は、死について思いをめぐらすことが多いように思う。お盆の季節であること、また戦争にまつわるさまざまな記憶が語られる季節、ということもあるだろう。◆「九相図」*というものを存じだろうか。私も初めて知ってからまだそれほど経っていない。京都では有名なお盆の精霊迎えの行事(8月10日)、六道珍皇寺*の「六道まいり」*の行事。この近く、松原通りの「六道の辻」と呼ばれる四つ辻に「六道の辻地藏尊・西福寺」があり、この日にあわせて地獄絵やこの「九相図」が公開されている。◆あるお后(檀林皇后といわれる)が「自分の死んだ後は、葬式をせずに遺骸を野原に捨てよ。その姿を見れば、色欲に捕らわれた者たちを少しは悟らせることができるだろう」と遺言され、その通りに実行された。その遺体が朽ちていく様子を九段階に分けてリアルに解説、絵で表現したもの。私の感じでは科学的にもかなり正確な描写であるように思う。このようなことを実行することができるとは、このお后、究極の教育者であるかもしれないなあ、と思ったことだった。覚悟して見ないとトラウマになりそうな絵巻だが、一見の価値がある。

(なお*)のついた語は、検索おすすめ語)

風呂の追憶

何年か前に、グループで西宮の酒造店へ見学にゆき、仕込み部屋へ入ったとき、暗い部屋に大きな酒の仕込み桶が天井まであるような。

その脇に立つて杜氏さんが、かき廻してゆくのだとか説明があつたが、もう私の頭ではさやかではない。その大きな桶を見て思い出したのだ。

過去の風呂桶を、足台はブロック二枚重ね。洗い場とてない、流し水はどこへやら。古い家からトタン屋根で継ぎ足した掘つ立て風呂小屋だったもの。何もかもが、爺さんの手作りだったと思う。誰も不足も言わずに、孫も弟妹たちも、その風呂で成長し柴ばなれし現代の風潮になびいたと思う。

わらだき、まきだき、三時頃から、十二すぎまで、すすで真っ黒、手はあかぎれ。近所から、「すすが飛んで来て洗濯ものが、かなわん」とぼやく声まで聞こえてきた。

つらかった、あの頃は、「一度静かに風呂につかってみたい」と思った事再三。

誰か私の名前を呼んでいるのに気がつき、顔を出したら

「いつまで何しとるんや」

「風呂の追い焚きや、わたしが終い風呂に入るのに、ぬるいわ、湯がないわ、誰かが減らしてくれるんや」と私も、主人にかみついた事もある。

両親を見送り弟妹たちも家をはなれ、文句を並べた人も見送った。ヤレヤレ。「ガス風呂の点検に来ました」と顔なじみの声がした。「ちよつと、入ってきて。この風呂みて」

「へえ」

「風呂桶沈んでるように見えるけど」

「そうやろ」

「四肢ふんだら、キシツと音がするような気がする」

土間板をはずして中へ入ってゆく様子。出てきた顔、ドロドロ。服上下共。

「まあ、気の毒に、どうやったんや」

「アカン、やり直さなきや。配管が破れて、排水が出来てない。えらいこっちゃ、大工事やなア。どうします」

「考えとくわ」

「二三日したら来ますわ」

早速やつて来たがな

「思い切つて風呂やり直すわ」

「息子さんはどんな返事」

「フンと言ったきりやがな」

見積書を見てびっくり、二人も来て説明するのやから。

「ウンわかった」腹もくくった。どうにでもなれ。その反面、お金は？

どうにかなるやろ。

トラックが荷物をつけて来たがな二台も。

ガチャ、ガチャ、グラグラ、凄い音。

近所もびっくりやるなア。声かけるのも忘れてしまっていたがなア。あとで謝っておこう。

入れ替わり職人さんの顔がかわり、一週間で完成を見た。

「やつと、出来ました。見て下さい」と言われ初めて風呂場と体面。

説明を聞き、「ありがとうございしました。やり抜く事でしたやろ。ホテルの風呂の様ですね。とつてもうれいです」感謝。

そして、仏さんにも手を合わせて「よい風呂が出来ましたで、あんたの分まで長生きさせてもらいますわ」のんびり足腰を伸ばしてゆつくりさせてもらいますわ。

ありがとう。

俳句

土田 裕

爽やかや敗れし球児に涙なし
鎮魂の袴り重ねて盆の月
落蟬のひと声妻を驚かす
覚めやすき齢となりて夜長かな
職退きし無聊にも慣れ籐寝椅子



編集後記

ほんとうに暑い日々が続きます。盆が過ぎれば、少しは過ごしやすくなるでしょう。

挿絵をお願いしている、鵜飼さんが毎回、幾枚もの絵をかいてきて頂きます。その中のセミが私を、遠き幼き日を思い出させてくれました。みなさん、無理をせずご自愛ください。



よっちゃんの担当看護師は、ミキちゃんである。32歳の小柄で可愛い女性である。ミキちゃんは、大変な働き者である。病院に隣接した大学の保育所に二人の男の子を預けて働いている。

「ミキちゃん、あんた何時ごろ寝るんや」

「病院を5時に出て、保育所へ子供を迎えに行つて、家に帰り家事をして寝付くのが1時ごろかな。朝は5時過ぎには起きるから、とにかく眠いのよ」

「大変やね。仕事やめて育児に専念したら。子供が中学生になるまでは、お母さんは家にいた方がいいと思うよ」

「私も悩んでいるんです。夜勤出来ないし、子供が熱を出せば急に休んだり、早退したりするから、パート待遇なのです。10年あまりこの病院で働いていますが、パートになれば10万余りで子供の保育代に消えてしまうから、何をしていることが分からなくなります。」

「だから、看護師不足は解消しないのだ。女医さんも同じような状況下にあるのだからな…」

「まだ、ここは良い方だとおもいますよ。それでもこうなんですから」

彼女は、少し変わった経歴を持つ看護

師である。H大学を卒業したのち、看護学部に入つて看護師になったのである。

彼女の話によれば、母親が40歳の頃に、

看護師になると突然に言いだして、看護

学校に通い、娘と同じような学生たちと

一緒に勉強したそうである。看護師にな

つてから、念願の障害児たちを世話さ

れたそうである。看護師を55歳ぐらい

で辞めて、今も子供たちのボランティアを

されているらしい。

ミキちゃんも、こんな母親の影響を受けて看護師になったのである。父親はエンジニアである。主人とは学生時代に知り合つて結婚した。

ミキちゃんも、そうなのだが病棟の何人かの看護師は、看護師になった動機の一つに「ナイチンゲール」をあげる。最初の担当医だったケイコちゃんも、同じナイチンゲールの本を読み感動したと言つていた。

男の医師からは、そのような話は聞か

なかったが、女性の病院関係者からは、

よく聞かれた。

ひとり看護師からぬ可愛い看護師がいた。彼女は髪を茶髪に染め、見るからに

必殺遊び人の感じを受けたので

「あんた、うちの娘と同じで夜な夜な大

阪ミナミのクラブへ入りびたりで、朝帰

りで出勤してるんやろ」

「えっ、わかりますか、私、遊びたいか

ら寮に入っているんです。両親が教師で

…。高校の友達も、あんたがいる病院に

は行きたくない、と言っていますわ」

彼女は遊び金欲しさに夜勤を多くやつ

ているのかと思ひ、

「あんた、夜勤専門か。他の人は助かる

やろ」

「ええ、夜勤手当がもらえますから」

私が、いつも聖書を読んでいるのを見

て「私も、高校の時に授業で習いました

よ、赤線引いて覚ええました」

「面白かったか？」

「全然…。授業だから」

「あんただけやわ、この病棟で聖書を読

んだという人は…。どこの高校や？」

「大阪のJ学院です」

「うちの末娘も行きたそうにしていたけ

ど、行けんかった。勉強嫌いやったから」

そんな看護師とのやり取りのなかで、

なるほどと思つた子が二人いた。

ひとりは、障害をもつ弟がいて、小さ

いころから面倒を見ていたから自然と看

護師になったという。この病院に来るま

では京大病院に勤めていた。

もう一人は、若い子であつたが、やはり

弟が膠原病を長年患つていて、かれの将

来を心配していた。

この病院は、プライド高き看護師でも

つている、とさえ思えた。彼女らの働き

ぶりは、緊張感を常に持つて迅速に患者

に対応していた。

しかし、彼女たちと話をしていると、

苦労が多いことがわかる。

一番は、夜勤である。毎夜交代で5人

が当たるが、一晚中ナースステーション

に詰めて監視カメラと患者からの呼び出

しランプに目をくばらなくてはならない。

ミキちゃんは、学生時代に主人と知り

合つたので結婚できたが、

「この職場では、結婚相手を探すのは

難しいです。独身の男の人がいないん

だから」

「研修医がいるじゃないか」

「むかしは、そんなこともあつたかも

しれませんが、今は聞いたことがありま

せん」

よっちゃんは、女性なら先生か看護師

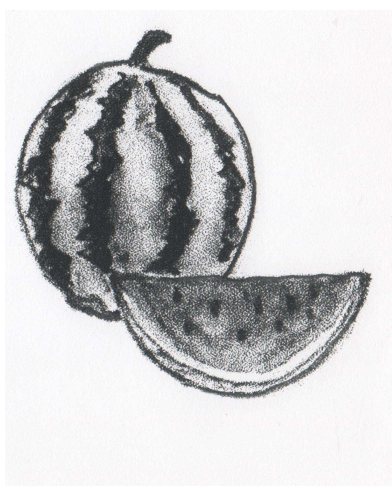
が理想の職業かと思つてきたが、なか

か大変なんだと思ひ直した。早急に働く

女性が置かれている状況を改善しないと

少子化は止められない。待ったなしの問

題だと思ふのである。



連載 「おつちよこチヨイぼけ」 〔一七〕
私のお友だち大図鑑…の巻

そのメールは突然やってきた。「長い間、お世話になりました。死にたあです」。はあ？「死にたあです」って何だよ！ どうして、こういうシリアスな内容で、おつちよこちゃん文字の打ち間違いをするわけ？ いや、そこはいいでしょう。何だつて急に「死にたあ」なんだ？ 私は慌てて、友達の携帯に電話した。何故だか、留守電。家にも電話した。何十回も呼び出し音が鳴っているのに、出ない。「まさか、そんなことはありえない」と常識が囁いているが、「もしかしたら？」と焦りまくる。メールに、「どうしたん？心配してます。電話、下さい」と昔の新聞の一行広告みたいなことを書く。ありましたよね、「のぼる、すべて解決した。帰れ。父」とか「母倒れた。連絡せよ。修一郎」みたいな伝言板。電話も携帯もなかった頃の連絡手段。

ではないメール。本心はこうだ。「このアホたれが！死ぬ気もないのに、死にたいなんて人騒がせなメールしてくるんじゃないいつちゅうの！しかも、間違えて打ってるし。死にたあ」

そのうちにコンサートが終わったのだろう。再び、不穏なメールが届いた。「本当に今までありがとうございました。毘にはまってしまうました」。クセなんだろうか。「い」と打つところを「あ」と打つのが。脱力しつつ、返信する。「毘って、どうしたん？」返事が来た。「騙されました」いちいち、わからない。

結局、その夜、長い時間、電話で話してわかったのは、本人は友達だと思っ、いろいろ相談していた相手が占い師さんだったということ。その人から、相談料一万五千円を請求され、「死にたあ」くなつてしまった、というわけ。毘でも何でもないやん。見解の相違やん。と、思ったが、落ち込んでいる友達に、さすがにそれは言いにくい。

「払う必要はないと思うけど」「怖いから、もう払ってん。どんな目に合されるか、わからへんから。わたし、外に出るのも怖いねん」。コンサートに行つてたんちゃうん？と思ったが、その言葉も飲み込む。「怖いって？ヤクザとか？」「ううん、呪い」。真夏の夜、深く脱力する私。

脱力系のお友達、その二。

やはり、メール。「お金に羽が生えて飛んでいきよる。やつぱり、仕事せんと。何かいい仕事ないやろか。立ち仕事はムリ。座つてできる仕事で、ノルマとかあるのは、かなん」。ふううつと息を吐く私。だって、このメールをくれた人、七十二歳、女性。悪いけど、年金で何とか生活していただきたい。この世代、まだ多少とも年金の金額が多い。かなりの預貯金もあるはず（去年まで勤めていて、しかも結構な高給もらつていて、何年か前だけど、退職金もがっぽりもらつてました。同じ職場で再雇用されていたわけです）。正直に返事を打った。「ワタシなら洗いの場の仕事を探して行きますが、ムリですよ。ね？ならば、暮らしをスモールにして、お金に羽を生えさせないようにして下さい」。そう言つてののに、数日後に届いたメール。「カツラ、買いました！二個。二個買えば、お安くなりますと言われたので。ご満悦を示すピースの絵文字が並んでいる。二個も？すごい。いくらで？」二個六十万円のところ、二個で百万円。思いきりがいいというか、カネ使いが荒いというか。アートネイチャーは私も買っちゃったから、四の五の言えた義理ではないが、お金がないと言いなから、何で二個も？もう退職しているし、家にいるんだから、髪の毛が多少薄くても放置、でいいのではないか。お世辞でも何でもなく（ここで、お世辞言つても無意味だけど）、先輩の髪の毛、気に

するほどの状態ではない。あくまで、おしやれのための部分ウィッグだ。ならば、一個で十分ではないのだろうか。それとも、お金に羽をつける趣味が、あるのだろうか？仕方がないので、こう返事をしておく。「日本の内需拡大に協力したんです。ね。今度、カツラの見せあいっこしましょう」。

見せあいっこ、しました。はつきり言いますね。私も先輩もイイ年ですからね、部分ウィッグをのつけたからって、みじも松坂慶子サンにも堀北真希ちゃんにも近づけないわけで。両者、全く然、代わり映えせず、「アートネイチャーが喜んでだけ」。そのアートネイチャーも、「こちらが言うなりに、何個でも買うお金持ちマダム」がお好きなようで、私らみたいな年金及び年金待機組は、それほど喜ばせることができない底辺の客である。

後日、先輩からメールが届いた。「お金がありません。もうバニーガールになるしかない」。夏だから、酷暑だから、つい先輩のバニーガール姿を連想してしまつた。ぞつとして、多少とも涼しくなれるかと思つて。いえいえ、これは冗談です。しかし、すぐに先輩からメール。「婆ニーガールなんちゃって！」脱力系のお友達はそれなりに楽しませてはくれる。ふううう

「うつ」について

伊藤 明精神科医

「うつ」については、これまでまとってお話ししていませんでしたので、ここで簡単に解説をしておきましょう。「うつ」の症状というのは、みなさんがもうご想像のとおりです。

元氣のない、うつとおしい気分。何事にも興味をもてず、楽しみや喜びを感じることができない。無気力で頭の中で考えをまとめることができにくく、何か一つの心配についてぐるぐると考えているけれど、そこから何か結論を引き出すことはできない。疲れやすく、新しい行動を起こすのが、おっくう。不安やイラつきが続く。自分が無価値だと感じ、自分を責めたり、将来に展望が見えず、死にたいとさえ思う。思考力や集中力が低下して、何かを決断することができない。食欲がなく食べられない（あるいは異常に食べる）。不眠がつづき苦しい、あるいは逆に一日中布団をかぶって寝ている。外からみると反応が鈍く、生き生きした感じがない。

うなものがありません。サラリーマンでは、朝、いつもの時間に起きにくく、気分が悪い、いつも読んでいる新聞の朝刊が読めない、読んでも頭に入って来ないというようなこと。女性に多い例は、夕食に何をつくるか決められなくなる。買い物に出かけても、何を買ったらいいかかわらなくなってしまう、といったことです。寝つきが悪くなる、食欲が落ちてくる、出勤できなくなるなど、毎日何げなく繰り返していた行動が、続けられなくなる時には、「うつ」が始まっていると、疑ってみることが必要です。

では、このような他に原因のある場合をのぞいて考えることにします。専門的にいうと、この「うつ」(気分障害ともよばれます)は国際的な分類法がありますが、それをここで解説することはできませんので、ここではいささか乱暴ですが、ごく単純化していつてしまうと、脳神経のはたらきに問題があるといわれる「内因性のうつ」と心理的な要因による「うつ」という二つを考えるとわかりやすいと思います。

「内因性のうつ」は(これは経過中に「そう」の状態が出てくる場合には、別に「そううつ病(双極性障害)」とも呼ばれますが、脳のなかの、情報伝達を担う神経細胞の伝達物質を含む系に障害が生じていると考えられています。その障害の詳しいことについては、現在盛んに研究が行われていますが、まだ完全には明らかにされていません。しかしこの直接の原因は、脳の内部にあると考えられている、と言っているでしょう。この「内因性のうつ」の場合は、ある周期をもっている例が多いものです。その周期は必ずしも決まっているものではなく、年に一〜三回くらいから、数年に一度あるいは十年に一度というような人までありますし、同じ人でも、その周期が伸びたりすることはあります。しかし、ある場合には「自分は決まってる季節になると、調子が悪い」というケースもあります。特に春や秋に、その周期がくるという人がよくあります。こういった「内因性のうつ」の周期は、近年ある程度、薬によって予防することができるようになって来いています。

これに対して「心理的な要因によるうつ」は、身近な肉親がなくなったとか、大切にしていたものを喪失した、あるいは心理的なショックを受けるといようなつらく悲しい出来事やストレスがあつて、それに反応して「うつ」になる、あるいは心理的に非常に悩んで「うつ」になる、というものです。これは、「反応性うつ」あるいは「心因性うつ」と呼ばれることもあります。こうした体験は、誰でも人生のなかに幾度かはあるもので、自然に立ち直るものであれば問題はないのですが、「うつ」の状態が強かったり、長く続いて回復しなかったりすると問題になり、治療が必要になって来ます。現実の患者さんでは、純粹に「内因性うつ」あるいは純粹に「心理的な要因によるうつ」という人はなく、何らかのかたちでこの二つの要素が入り混じっているものと思われます。したがって、次のようにも表現できるでしょう。「うつ」については、「内因性うつ」と「心理的な要因によるうつ」の二つを両端にした線分を考えると、現実の「うつ」の患者さんは、そ

の両端を結ぶ線分上の、ある点に位置することになります。つまり、この人はどちらかと言えば「内因性うつ」の要素が強い人だとか、あるいは「心理的な要因によるうつ」の要素が多い人だということに。たとえば、毎年春になると、何となく気持ちがふさぎ込みやすい傾向があるけれど、治療が必要なほどではなかったのに、今年は心理的なストレスがもちあがり、倒れてしまった、というような場合。

これを言い換えると、「うつ」というものには、一つの連続的なスペクトルというものがあり、「うつ」の人は、そのスペクトルのなかの一点を占めることになります。このスペクトルの両方の端に位置する人は現実にはなくて、必ずこのあいだの点になります。ただそれが、「内因性うつ」の近くになるか、「心理的な要因によるうつ」の近くになるか、といった位置が問題になるのです。

* *

「うつ」の心理を考えてみます。十年以上患者さんと付き合っただけで観察していると、気分が悪くなる時の独特のパターンというものがあるようです。これはいろいろな人をみていても、共通しているものがあるようです。「うつ」の状態になると、世界が灰色に見えて来て、ものを考えようとしても、頭のなかで考えがまとまら

ず、前へ進むことができなくなってしまう。

将来の不安、心配事とか、「あんなことしなければよかった」などの後悔、自分を責めて死んでしまおうといった内容の考えが文字通りぐるぐる頭のなかをまわっているのです。一旦そこに入り込むとそのあたえられた条件が変わらないかぎり外へ出られず、一日中その中をぐるぐるまわる、ということになってしまいます。すると頭は動いているのに、有効な形で働かず、「出口なし」の状況になり、ちようどブラックホールのなかに吸い込まれていくような気持ちになります。精神的なエネルギーがそれによって吸い取られ、他のことは考えられなくなってしまう。視野も狭くなり、視点が悪い方へ固定されてしまい、発想の転換ができなくなっていく。こうして「うつ」とはまり込んでいくことになります。

特に、普段には理性的に考える人でも、身体が疲れている状態の時には、この「ぐるぐるまわり」にはまり込みやすくなるものです。自分があせっていても、それに気づくことができなくなってしまうことが必要なのです。このぐるぐるまわりの心理について、わたしは思考回路のなかに実際にそのような論理回路が形成されているのではないかと想像しています。

試みに、私はこれを「悪性回路」と名づけています。これが軽い場合には、場面を変えたり、気晴らしをしたりといったことで、自分でもきつかけがあれば転換できる場合も多いわけですが、「うつ」の患者さんでは、自分で回復することが難しいことがあり、こんなときには薬が効果を示す事になります。薬を飲んで休息することによって、転換できることが多いのです。

このように視点が固定化してしまうことと、視野が狭くなってしまうこと、それにここから見たものを、自分をとりまく世界へと、過度に一般化するというプロセスが、「うつ」の心理の本質的な特徴だと、私は考えています。

(この項、続く)

ダチョウの平和論

大江雉鬼

オリジナルがどこかは知らないが、ヨーロッパには「ダチョウの平和論」なる言葉があるらしい。何の偶然か、このところ立て続けに二度ほどこの言葉に出くわすことがあり、取り上げる気になった次第。

まず「ダチョウの平和論」なる言葉の意味するところだが、これはダチョウの生態に対する俗説に起因している。ヨーロッパでは「ダチョウは敵が迫ると地中に頭を突っ込む」と信じられていて、そこから現実から目を逸らすことで安心を得ようとする態度をいうとのこと。手許にある英和辞典で調べてみると、ostrich belief という慣用句が登録されていて「自己欺瞞(の逃避主義)、事なかれ主義(ostrich policy)」「だちようは追いつめられると砂に頭を突っ込んで隠れたつもりでいるということから」という解説が載せられている(『研究社「新英和辞典」第四版一九七七年。四半世紀も昔の辞書だから、このフレーズが新しい造語でないことは確認できる)。

私がこの言葉と出会ったのは、一つ目は原発廃絶運動を批判する文脈だった。国境の向こう側に原発大国がある場合、自国内から原子炉を無くすだけでは問題の解決にならないとする主旨で、闇雲に反原発を訴えるだけの運動を批判する文



章である。

もう一つは国防論議の文章で、国際的な緊張が高まる中にあるのは平和憲法の理念をお題目のようにくり返すのは「ダチョウの平和論」であるとする文章である。たまたまのことであるにしても、異なる文脈でありながら近接するタイミングでの遭遇だったので、強く印象に刻まれることとなった。

さて、ここからが本題となるのだが、これら二つについて、それぞれの主張を吟味するつもりはない。関心があるのは「ダチョウの平和論」という使い方が引用の作法として正当かどうかという問題である。どういうことかというところ、これら二つは、自説を補完すべく「ヨーロッパには「ダチョウの平和論」という言葉があります」という振りをしておいて、揶揄を含むその内容を批判対象に当てはめている点で共通しているのだが、そうした持つて行きようが正当かどうかということである。辞書で確認が取れたように、ostrich belief などの慣用句は古くから存在していたが、それは日本語に置き換えるとすれば「平和論」のような高邁なものではなくて、もっと卑近なもの、世間の様態ぐらいを指す言葉だった。その程度のものであるからこそ揶揄の対象になるのであって、それをあえて「平和論」という仰々しい日本語にまで高めるのなら、そこには論者の捉え直しが加わっている。レトリックとしての引用にはさまざま

なパターンがある。和歌の本歌取りや物語文学の准拠など、表現手法として洗練されたものも広い意味での引用なのだが、もつと簡単な引用もある。それは煩雑な前提議論の割愛を目的とするものであったり、読者や聴衆の興味を引きつけるために先人の用いた小粋なフレーズを使うなどがそれである。あるいは、評価の確定した事柄を始発点に措定することで自説の価値を最初から高めておくというのも引用の一種に数えられよう。それでは「ダチョウの平和論」についていえばどうだろう。少なくとも日本語としては熟したものではないので、興味関心を刺激する作用があるには違いない。事実、私自身、この耳慣れないフレーズに出会ったことが契機となってあれこれ愚考を巡らせるに到っている。

しかし、それ以上に注目すべきは「ヨーロッパには」という言葉があります」という前振りである。「ダチョウの平和論」という theory なしは principle が存在しているかのようにいい、それを批判することが普遍的な態度であるかのごとく持つて行く論法である。だが、すでに見たように、揶揄されてしかるべき卑近な処世術をいう時にダチョウが引き合いに出されることがあっても、それは「論」と呼べるシロモノではない。

仮の話、日本には「読鯖法」や「狸皮計算法」という計算術があつて云々とかの文章があつたとすれば、日本人ならそ

れが誇張ないしは諧謔、すなわちレトリックであることに気づく。しかし馴染みの少ない海彼の事情であれば、レトリックであることが分からず、論者の言葉を額面通りに受け取りかねない。そういう意味では「ダチョウの平和論」的な論法は欺瞞すれすれのところにあると言わねばならない。

もちろん、最初からレトリックであることがわかっていれば、目くじらを立てるには及ばない。レトリックが、話の印象を高めることによって読者聴衆を説得するための技術であるとすれば、「ダチョウの平和論」はその本義に適っているからである。しかしテレビ番組での「演出」が実はヤラセであつたと露見するとたちどころに番組全体の信用を失墜させるのと同様、欺瞞と紙一重のレトリックは、本筋がどれほどの射たものであつたとしても、主張の全体を殺してしまうこともある。

地球一周旅行記 その4 世界とは 人類とは何か

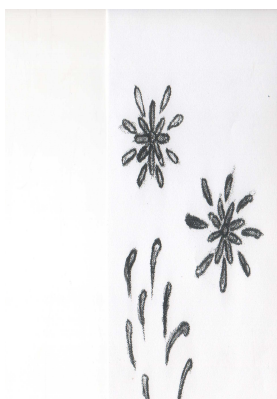
若山哲郎

1月25日中国、廈門から船は再び出港しました。慌しい行程ですね。100日余りとはいえ船で世界17都市も回るのですから一箇所でゆっくりしていられません。なにか一周することに意義がありそれぞれの箇所の滞在にはあまりこだわっていない感じがしますね。とりあえず疲れて一晚眠つてしまふと、また今までの日常生活に戻りました。

日常といっても陸上とは違います。電話もかかってこない、訪問者もない、どこそこへ行かなければならないと言う事もない。煩わしいことが一切ないので世間との関係を断絶した隠遁者のようなものです。一時、世の中から消えている。異なる世界で生きているのです。

縛られるものが何一つない。食事もしなければならないと部屋でこもっていることも出来ます。ずっと部屋で閉じこもり死んでいてもわからない。でもさすがにそれは出来ません。一日に一度、ルームサービスがシーツ交換や掃除に部屋を訪れるからです。

私は乗る前、この船は旅行費が豪華客船に比較して格段に安いのでユースホステルのようなセルフサービスかなと思っていました。しかし立派なルームキーパ



ーがいました。でもそこは世界一周船
全員外国人です。そもそも前回お話し
ようにこの船のクルーはすべて外国人。
私の部屋担当はインドネシアから来て
いるマーヤさん。片言の日本語は話せま
す。やはり英語が主なコミュニケーション
手段。船内では英語が公用語でない様々
な国からの人々が沢山いますが共通語は
英語です。 “ Hello My name is
Waka-San from Kyoto.”で軽くあいさつ。
マーヤさんは明るいおねえさんで年齢3
0歳前後、普段はバリ島でツアーガイド
をしています。この船は三食住まい付き
で給料も現地の仕事に比較すれば良いの
だろう、度々乗るのだとか。

さて先輩おばちゃんのアドバイスど
り主体的に行事やセミナーに参加するこ
とにしました。毎日の行事予定はホール、
会議室など場所別、時間帯別に船内新聞
へ掲載されます。それを見て好みの行事
に行くわけです。行事は講演会等セミナ
ー系、ダンス、エアロビ等のアクティビ
ティー系があります。特徴的なのは参加
者が主催する自主企画といわれるもの。
これは他のクルーズにはないと思われま
す。参加者が何か自分の専門や得意なも
のを皆に教えたり討論したりするもの。
私はまず朝の自主企画「聖書を読む会」
に参加することにしました。

名くらしいの人が座っていました。リーダ
ーらしき年配の男性がさて時間ですから
お祈りから始めますといきなりなにやら
唱え始めました。怪しい雰囲気です。す
ると他の人が、私たちはそのような仕方
で毎日お祈りはしませんと言いつしまし
た。様子がおかしくなってきたので、私
は、この船では多分宗教布教は禁止され
ているから誤解を受ける行動は良くない
のでは、という意見を言いました。そう
するとリーダーは素直に、そうですね心
の中だけにしておきましょうとなり納得
して始まりました。自己紹介がありまし
た。当たり前ですがほとんどがクリスチ
ヤンです。とりあえずマタイ伝を読むと
こになりました。私は所属している合唱
団でマタイ受難曲を歌ったことがあるの
で内容は大体知っていました。皆で段
落毎ひたすら交代で読むのです。毎朝3
0分、信者でもないのですがこれが結構
良い精神修業になります。

でも時々わからない箇所の説明を求め
るのですが毎回適切な答えを得られませ
ん。私たちは宗教の信者さんは理屈が分
かった上で信じていると思いがちですが、
宗教は理屈抜きで信じるものですね。
確かに神父さんや牧師さんは解説をして
いますがそれを聞いている信者はほとん
ど理屈ではなく有難いお言葉として聞い
ているので、これをこんどは自分から他

の人に説明しようとしても、これはこう
なって当然だ、としかいえません。宗教
とは、信者とはそういうものでしょう。
でも理屈でなく信じられることはある意
味すごいことでもあります。

10時からは7階ホールでダンス教室。
社交ダンスです。陸上にいればこんな
絶対やりません。無料、初心者OKです。
ほんの少し、女性と近づきになれるかな
という期待でもって参加することに。最
初は基本ステップ。前二歩、後二歩、横、
横、ひたすら繰り返し。中央の舞台に先
生がイヤーマイクを声にお手本を見せま
す。歩くだけでなく腰も使つて。結構
疲れます。周りを見渡すと70歳代のお
ばちゃんばかり。色気づいて大変です。

この理由が後からだんだん分かってくる
のですが。休む間もなく次はセミナー。
このセミナーは主にこれから立ち寄る国
の問題や地域の環境問題、歴史問題など
テーマを設定しそれぞれ専門の講師によ
る講演会です。講師は大学教授やジャー
ナリスト、科学者や冒険家などです。過
去にはこの船に池上彰さんや香山リカさ
んらの有名どころが来ていたらしいので
すが、昨今はそれほど人は来ていませ
ん。

講師はずっと船に乗っているのではな
く、指定されている期間だけ飛行機で最
寄の港へ来て乗船した適当な港で下船
して帰っていきます。セミナーの講師を

水先案内人、省略して”水案”と呼び、
それをサポーターする自主参加のサポータ
ーを水先案内人。パートナー、略して”水
パ”とこの船では呼びます。この船独特
の言い方ですね。リピーターが多いので
他の人はこのような言葉がすーと出てき
ます。年配おばさんのアドバイス、積極
参加とはこの”水パ”になってお手伝い
をすることです。そこでテーマが”南太
平洋諸島の環境問題”というセミナーの
サポーターになることにしました。講師
は早稲田大学の準教授で南太平洋の島生
まれ白人の米国人。彼はお父さんの仕事
の関係で南太平洋に生まれ育ちポリネシ
アやミクロネシアの歴史に興味を持ち大
学へ進んだとか。水パのお仕事は講義の
案内ポスターを作ることや、講義の内容
に沿ったモックアップを作ったり、寸劇
をしたりすること。水パは勿論、全員ポ
ランティア。皆々、初対面の人達です。
でも集団というのは不思議なもので人が
集まれば自然と役割がきまり事を運びま
す。リーダーになるというものは一種の
特性ですがそれだけではリーダーになれ
ません。必ずそれに従う人が必要です。
ところがこういう人が沢山いるのです。
会社で働いているのでもなく、特段の上
下関係も、利害関係もないのにある人の
命令に従う。これは一体どうゆうことな
のでしょうか。私が感じたリーダーのパタ

ーンの共通点は決断がはやいということとその決断に理屈をつけないということ。決断について理屈をつけないければならない指示は形が出来上がった組織では有効でしょうが、そうでない集団ではかえって混乱をもたらす統一できません。ようするに根拠なき感覚でうごける人がリーダーの素質があるということです。良く言えば即決力、悪く言えばハッタリ。そんな人に多くの人々は従います。そして一旦、ある特定の従う集団をつくれればそれからの拡大はものすごく早いです。多分、人間は孤立するのを恐れ、集団から排除されたくないという帰属心理が働くのでしょうか。

そんなことで、私から見たらこんな人がなんでリーダーかと思うような人が取り敢えずテキパキと段取りを指示しはじめました。気に入らないといっても私がリーダーをする気もならないので仕方なく従いました。あー、こんな風に世の中も政治も動いているのだなと実感しました。

水パの特権は水案つまり講師の先生と打ち合わせや飲み会などで直接に話ができること。これは大したメリットです。その道での専門、有名どころですから様々なことが聞けるわけです。そう言うことで、私も勇んで第一回打ち合わせ飲み会に参加しました。南太平洋は過去、

原水爆実験など環境問題が繰り返し行われ日本の第五福竜丸も被曝しました。それらのことを米国人としてどう考えるのかなどを聞きたいと思っていました。ところが集まってみると講師の周りはグルつつとおばさん連中が取り囲んで中に入るすぎがありません。そうすりリーダーはおばさんで興味があるのは学問的なことではなく個人的なことばかり。どちらにお住まい、奥さんは、子供さんはとか。たまたまその白人講師はイケメンだったのでそうだったのかもしれませんが、そして私らおじさん男性のひがみもあったかもしれません、ひどい状況です。

わたしは環境問題など社会的意識レベルの高い人々が関心をよせるものだと思うていましたが近頃ではそうではないのですね。ただのファッションにしか思っています。こんな人たちが講師をサポートして資料を作ったり、自分たちで考えた寸劇を試みてみても所詮底が浅いので議論が深まりません。何度かセミナーを開いて沢山の人が聞きにきても内容がないので質問もでません。しびれを切らせて私がかつと歴史的なことを話さなければ環境問題は一時の興味だけになると発言すると司会をしていうスタッフからの驚くような返答がありました。この場は意見を言うところではなく講演会のなかで話されたことの中での疑問に限定し

て下さい。茫然自失になりました。えー自由に質問できないの。なんなの。これも後に明かになるのですが、このクルーズが抱えている大きな問題から来ているのです。議論をさせない、意見を言わせない、特別な背景があります。

気をとりなおし、別のセミナーを今度は聴くだけにしました。今回のクルーズで行くアフリカについてのセミナーです。某有名新聞の元記者が語る現代アフリカの諸問題です。しかしこれも期待はずれ。アフリカで珍しいものを食べたとか、銃を撃ったとかのワイドショー的な体験レポートばかり。もう少し詳しい歴史的、政治的な背景も話してよ。知らないはずないだろう。なぜ話さんの。しびれを切らしてまた質問しました。するとここでも司会者がストップ。ストレスが溜まるばかり。仕方なく、今度は英語講座へ。英語講座は他のイベントとは違い有料です。英会話学校と同じようにレベル別のクラス制で、乗船前に一応自分のレベルを申請しています。しかし再度テストをしてクラス分けをするらしいのです。ホールに行くとき50名くらいの人が集まっています。しばらくすると舞台にどどーとたくさん外人がでてきました。外人というのはいつも陽気です。彼らが先生です。言語は英語とスペイン語。説明がありすぐにクラス分けテストです。問

題用紙が配られ英作文やらヒヤリングやらが出題されました。私は学校英語には慣れているので比較的筆記試験はできました。しかし問題は会話テストです。

正直、この船に乗る前に某有名英会話学校に半年程通っていましたがさっぱり上達しませんでしたので自信がありませんでした。しかしいざ対面で外国人の先生と話をすると意外に話せるではありませんか。不思議です。少し考えて見ました。原因がわかりました。マリーヤさんです。毎朝、英語で話していたのです。慣れですね。それとセミナーでは英語で翻訳がきます。それを知らずのうちに聞いており耳も慣れていたので。ということの後日クラス分け発表がありました。メンバーは6名、男、女3名。まずは自己紹介、うおー皆かなりしゃべれる。

カナダ人のアン先生はこのクラスは上級ですと言われました。どうしよう、そんなレベルではないよ。たまたまテストがよかっただけ。

こうして毎日をあわただしく過ごしているうち中4日間はすぐに過ぎ船は12月1日、2番目の寄港地シンガポールへ入港することになりました。そしてこの地での行動は英語ツアー。英会話クラスのメンバーで英語を駆使し一日中市内を観光するというもの。さて珍道中ということやら。次回をお楽しみに。

坂本一光

『芥川だより』の読者はどういう人たちだろうか。そして、多様な寄稿文を読みながらどんな感想を持っているのか。読者の多くは大人であろうが、年齢は90歳くらいまで相当の幅がありそうである。仕事をもつ人もいれば、退職者、年金生活者も多いだろうと思う。そんな風に想像はしながら、よもだ蒙の素老人は、読者のことはほとんど考えずに、自分の書きたいことを書きたいように書いてきた。その反省になるはずもないが、今回はよもだをやめる。やめてどうするか、校長になって中学生に向かって話をしてみたいと思う(「それがよもだや」)。校長が置かれた状況は、中学生の弁論大会、しかも英語での弁論大会に当たっての校長の講話に設定した。言葉について、中学生に何をどう伝えるか。よし、焦点は絞られた。大げさに言々と、数にだって文化があること(文化の多様性)、それを一例に何であれ、多様性を貫く普遍性があることについて、中学生に語ってみたいのである。みなさん、中学生になったつもりで聞いてください。

『みなさん、人間は、言葉によって世界を理解し、表現します。言葉によって、自分の考え、意志、気持ちを伝え、他者

と交流する。言葉がなければ世界を理解できないし、したがって、自分を表現することもできない。言葉は、話されることも、書かれることもある。目と目で通じ合う、ともいうから、身体が言葉を発することもある。いずれにしても、人間は、ものごとを、言葉に置き換えて理解している。さて、こんな言葉があります。『魂は表現されなければ、それが存在するのかわるか、当人にとってさえはつきりしない』というのです。言葉がなければ世界は無に等しい。それだけでなく、自分自身までもが無くなってしまふ。言葉は、不思議なものです。

そのうえで言えば、人間は、民族や国家、地域によって異なる言葉、言語をもっている。同じもの、同じ現象を異なる言葉で表現するからには、簡単に言えば、文化が違う。英語を含めて外国語を学ぶことは、異なる文化とそこに生活する人々を理解することでもある。そのとき、同時に、私たちは、私たちの日本語で、世界をどう理解し表現しているか、私たち自身のことを考える。考えなきや、外国語を学ぶ意味はありません。そうすると、共通するものと違うものが見えてきます。この、見えてくるものが大切です。一つの例として、数、数字ですね、数の文化を考えてみましょう。いま英語は、世界でもっとも広範囲に通用する言語になっている。英語で数をどう表現するか学んだとき、みなさんは、私たちの数の

文化と違うことに気がつきましたか。

まず、私たちの数の文化。一、十、百、千、万、と一〇進法で10倍ごとに数の呼び方、ある大きさの数の名前が変わりますね。1万までの数は、万より小さい数の名前を使って、たとえば、3千4百5十一のように呼ぶ。万の次に数の名前が変わるのは、1万の1万倍で、1億です。1万から1億までの数は、万、千、百、十、一を使って表す。たとえば、3千4百5十六万という風に。次に、1億の1万倍は1兆という。このように、漢字文化圏の数の名前は、1万倍ごとに、4桁ごとに変わります。だから、かつては、私たちは大きな数を算用数字で横書きするとき、名前が変わる4桁ごとの場所に、カンマ(句点)を打ちました。

(例) 123,456,789,123,456

これは、123兆4567億8912万3456と簡単に読めます。しかし、今、カンマは3桁ごとに打つでしょう。先ほどの数に3桁ごとのカンマを打つと、

123,456,789,123,456

これを、123兆4567億8912万3456とさつと読める人はどうかしている(無理をしているということですが、銀行マンさん、ごめんなさい)。

実を言うと、これは、例えば、英語圏の数の文化なのです。一(one)、十(ten)、百(hundred)、千(thousand)、このまでは10倍ごとに名前が変わって私たちと同じだが、その次の方には、特別な名前

はない。千を使ってten thousandです。その代わり、千の千倍の数をmillion(100万)という新しい名前と呼ぶ。その次、billionの千倍は、billion(10億)です。billionの千倍は、trillion(1兆)となる。英語の数は、このように、千倍、3桁ごとに名前が変わっている。だから、彼らはカンマを3桁ごとに打つのです。この打ち方は、本来、私たちの数の文化にはないことです。そして、先ほどの数は、英語でこう読む。

123(one hundred twenty-three) trillion 456 billion 789 million 123 thousand 456と。

4桁ごとであれ、3桁ごとであれ、肝心なことは、数の名前が変わるところに区切りのカンマを打つこと。本来、人類は、異なる文化をもっているても、同じ合理精神を発揮していたのです。何十年かまえに、3桁ごとにカンマを打つことがグローバル・スタンダードになったのは、文化とは別の事情でしょう。

その事情が何かということには今は触れません。

このように、数字の名前一つをとっても、言葉というのは人間の文化をいろいろ考えさせてくれます。そんなことも考えながら、国際化の時代です、今日はみなさんの英語による弁論をしつかり聞きたいと思います。』

(かたちは心であり、心はかたちになる

平安のドンファン、恋に死す(巻30. 1)

石川 吾郎

今回は、平安時代のドン・ファンとして有名な平中の物語。一種のスカトロジヤ(糞尿譚)といえる内容ですので、教科書には絶対というほど出てきません。従って「教科書に出ない度」は高いです。さつそくはじめましょう。

* *

今は昔、兵衛の佐(すけ)の平の定文という人がいた。あだ名を平中(へいちゅう)といった。家柄もよく、男前でダンディ振りもなかなかだった。立ち居振るまいも高貴な感じで、おしやべりもウィットが効いていたので、この当時、平中に敵う男はだれも居なかった。こんな男なので、人妻や娘、まして宮仕えをしている女たちは、この平中から言い寄られないものはないほどだった。

ところでその当時、本院の大臣(おとど)藤原時平という人がおられた。その家に侍従の君という若い女房がいた。

顔かたちはまことにすばらしく、才気煥発な方であった。平中は、くだんの本院の大臣の館に普段から出入りしていたので、この侍従のすばらしい様子を噂で聞き及び、かねがね命がけて恋をしていたのだが、侍従は平中のラブレターに返事

も書かなかった。平中は嘆息し、性懲りもなくまたラブレターをよせる。「ただ『見た』の二文字だけでも、お返事をください」と、繰り返し泣くばかりに懇願して書き遣った。その使いが今回はめずらしく返事をもって帰ってきたので、平中は嬉しさのあまり、物につつかえながら転がり出て、その返事を引つたくるように見る。と、自分の手紙に『見た』の二文字だけでもお返事をください」と書き付けた、その『見た』の二文字を破って、薄い鳥の子紙に貼り付けて、女は返事をよこしたのだった。平中はこれを見て、ますます悔しくつらく、思いをつのらせるのだった。これは二月の末のこと。「もういい。これで止めにしよう。これ以上悩んでもどうしようもない」と悟って、その後は手紙も出さずに過ごしていたのだが、五月も二十日ばかりになって、梅雨の降り続く五月闇の夜、平中は「今夜のような日に忍んで行つたなら、想う心がどれほど強いものかを感じて、グラリとするかもしれない」と算盤をはじき、夜も更け雨音も止まずに降り続ける中、目指すものも見えない闇の中を、内裏から無理やり本院まで出掛けていった。本院に着くと、局(つぼね)に以前から取り次いでくれていた女の童(めのわらわ)を呼んで、「想い余つてこのようにやってきました」と言わせた。するとその女の

童が帰ってきて答えるには「ただ今は、殿様のお前におりまして、他の方々もまだご寝所に下がられておりませぬので、お逢いすることはできません。もうしばらくお待ちください。皆さんが寝静まつたら忍んでまいりましょう」と言つてきた。これを聞いて、平中、胸を高鳴らせた。「だからつてことよ。こんな夜にわざわざ出て来た男を憎く思うはずはない。よくぞ出て来たものだ」と思い、暗い戸の蔭に隠れて待つ身は、何年も経つたような気がしたものだ。二時間ばかり経過した。人々が皆寝る音がする。座敷から人がやつてきて、引き戸の掛け金をそつとはずした。平中はしめたとばかり遣り戸を引きあげると、簡単に開いた。夢心地で、これはどうしたことかと思ひながらも、うれしさに身の震える思いだった。けれどここは冷静にと、頭を冷やしそつと室内に入つてみる。空薫きの香のかおりが部屋に満ちている。平中は部屋の中に進み、臥し所とおぼしいところを手探りしてみると、女はなよやかな一重の着物に被つて伏していた。頭や肩のようすを手探りすると、頭は華奢な感じで髪は氷のようにひんやりと手に触れる。平中は、うれしさに有頂天になって、思わず手も震え、物を言い出すこともできなかった。そこで女の言うには、「たいへんなことを思いだしました。部屋障子戸の

掛け金をかけないできてしまいました。今行つて掛けてまいりますわ」と言うので、平中は「そうなんだ」と思い、「じゃあ早く帰ってきてくださいね」と言うのと、女は起き上がつて上に着ていた衣を脱ぎ置いて下着の単衣と袴だけの姿で出て行つた。その後、平中は衣を脱いで準備万端で待ち伏していたが、障子戸の掛け金を掛ける音は聞こえて、もう戻ってくるハズと気持ちにはやるのに、足音は奥の方に去つていくように聞こえ、こちらに来る音はとんとしない。怪しんで起き出し、例の障子戸のそばに行つて確かめてみると、掛け金はちゃんとあつた。それを引いてみると、向こう側から掛け金が掛けられていて、そのまま奥へ行つてしまったのだった。平中は、言いようもなく悔しく、地団駄踏んで泣けてくるのだった。

果然とその障子戸のそばに立ち尽くしていると、流れる涙は、降り続く雨にも負けないくらい。「こんなにして部屋にまで入れて謀るとは、何と憎らしいことだ。こんなこととわかつていれば、一緒について行って掛け金を掛ければよかった。マロの心を試そうとして、こんなことをしたにちがいない。どんなにトンマな奴と思われているだろう」と思うと、会えなかった場合よりも、憎らしく悔しいことはなはだしい。そこで「夜が明けても、

この局に寝ていてやろう。オレサマが通ってきたことが知れるのもイイだろう」
と思ってもみたが、夜明けが近くなると、人々の起き出す音がしてきたので、冷静にもどって「この姿を露見してしまうのもいかなものか」と考えなおし、夜の明ける前に急いで抜け出したのだった。

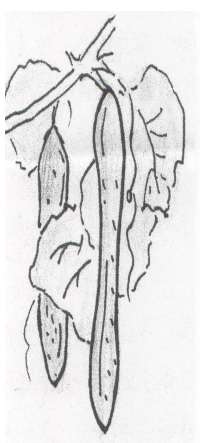
さて、その後は「どうにかして、あの人の悪い噂を聞いて、興ざめになってみたいものだ」と思うが、そんな噂は露ほどもなく、平中はこの女への想いで身を焦がす日々が続いた。そこで思うに「あの人がこんなに美しくすばらしい女性であったとしても、毎日便器にするものは、自分らと同じものだろう。これを目の前に見れば、興ざめになるだろう」と思いついて、便器の箱を仕える侍女が始末しに行くところを奪い取って見てやろうと計画した。そこで、そんな気配を見せずに、例の局のそばにやってきて様子をうかがっていると、歳のころ十七八ばかりの女が、姿有り様はなかなかよくつて、髪は腰に少し足りないほどの長さ、涼しげなナデシコ重ねの薄物のあこめを着て、濃い紅の袴を無造作に引き上げて、丁子(ちようじ)で染めた薄紅色の薄物の布で便器の箱を包んで、赤い色紙に絵を描いた扇をかざしながら、顔を隠して局から出て行くのを見つけた。シメシメとほくそ笑んで、見え隠れに後をつけて、人の

目につかない所で走り寄ってこの箱を奪い取った。この女は泣いて抵抗したが、無情に奪い取って走り去った。人のいない建物の中に入り内側から掛け金をかけてしまったので、例の侍女はその外に立ちつくして泣いていた。

平中はこの箱をじっくり見ると、金漆を塗った立派なもの。この箱の有り様を見ると、開けることもひどく気の毒に思えて、中に入っただけのものはいざ知らず、まずその包みと箱の有りが、人のものとはあまりに違つてすばらしいもので、それを開いて中を見てイヤになるのも心惜しくなり、しばらくの間、開けず感心してながめていたが、こんなこともしては行かないと、我に帰って、恐る恐るその箱の蓋を開けると、丁子の香りがかぐわしく漂ってくる。予想を裏切られ怪しんで中を覗いてみると、薄黄色の液体が半分ばかり入っている。また親指ほどの大きさの黒っぽい黄色の物体の、7、8センチばかりの長さのものが三切ればかり丸まってゆれている。「きつとウンチだろう」と思つて見ていると、漂ってくる香りが何ともいえず芳しいので、そばに木切れがあるのを取って、それに突き刺し鼻にあてて匂いを嗅ぐと、この上なくかぐわしい黒方(くろほう)というお香の匂いであつた。すべて予想もつかないことであつた。「これはただの人間でなか

つたのか」と思ひ、これを見てからというものの、ますますこの女を手にいれたいと、心も狂うようになってしまった。その箱を手元に寄せて、その液体を嚙つてみると、丁子の香りが心に染み込むようだ。またその木切れで刺したものの先を少し舌でなめてみると、口に苦くまた甘い。芳しいことは譬えようもない。平中はよく頭のまわる者だったので、これを考えるに、「尿としたのは丁子を煮て、その汁を入れたのだ。またもう一つのは、山芋に練り香を甘葛(あまざら)に練り合わせて、大きな筆の軸に入れ、それから出してきたものにちがいない。これくらいのことは誰でも思いつき実行もするだろう。しかしどうして男がこれを奪い取って見るだろう、ということを用意できたのだろう。あきれるほど何もかも大した気のまわり方だ。

《コメント》
これは芥川の「好色」の原話として有名な話です。芥川の小説の筋書きは、ほぼこの話しの通りというくらいの完成度の高い説話です。芥川の小説では、平中が便器の箱を奪うのをとっさの所業としていますが、これは原話にあるように計画的としたほうが物語りとしては面白みが増すように、私は思います。いずれにせよこの話しは、日本の古典中屈指の恋物語りであり、大人のエロスが丁子の香りに漂ってくるようです。なお、佐(すけ)は、兵衛府の次官のことを言います。また障子戸は当時、紙は貼らないで板張りの戸だったようです。さらに「黒方(くろほう)」というお香は有名なもののように、で、「源氏物語」にも登場するとか。現代にも復元されているということです。最後の一文は、「今昔物語集」の編著者のコメントと思われまふ。私はこの本気のような、おとぼけぶりが大好きです。



極めてつまらぬ話した。男も女も何と罪深いのだろうか。そんなわけなので、女にはめつたと心を寄せるものではないと、世間の人々は噂しあつたと語り伝えていることだ。《終わり》

哲学屋のつぶやき (2)

祖蔵 哲

小生、常々小難しい文章を書いているものであるからこの欄でもつい少々堅苦しい話題や内容になっていて読者には大変申し訳ない。そもそも哲学というものが世間にたやすく受け入れられるとは思っていないが、また一方生活になにも役に立たない学問などはその存在価値があるのかとも思い悩む時もある。今回は「神話」「宗教」と哲学との関係について少し考えてみたい。映画やテーマパークでの流行も影響し「神話」は今なお私たちにとって身近であるし、また一方国際的な紛争などを通じて「宗教」は現代的な問題でもあります。

前回、古代ギリシャの哲学者アリストテレスは「人間は知ることを欲する動物である。」といったことを紹介しました。約20万年前に人類が誕生して以来、人間は問い続けてきた。なぜ太陽は朝、東から昇り夕に西に沈むのか。夜に星が瞬き、なぜ月は欠けるのか。人間はどこから生まれ、死んでどこへ行くのか。様々な物語が生まれ、語り継がれていきました。何故ということに答えることで皆が一応、納得する、分かる。これが「神話」です。「神話」とは「世界」の説明なのです。それを「言葉」によって物語る

そして言葉に出来ないところは象徴的なもので表現されました。人間の欲望は万能の神々になり、想像の動物も生まれました。「言葉」というものにはその表現する対象の限界があります。人間は今まで見たこともないもの、考えたこともないものを「言葉」にすることはできません。今まで見たもの、表現されていた言葉を使って類推するのです。ですから神話は豊かなイマジネーションの世界になります。しかし、これらはあくまで物語。子供が神話を聞き、想像の世界に遊び、疲れてぐっすりと眠りにつくことはあっても、現代人にはその内容を納得させることにはなりません。

さて、神話の中で世界の成り立ちを知った人類は次の知るべきことに遭遇しました。ある時は優しく恵みをもたらす自然もひとたび牙をむけば人間は訳なく殺されてしまう。でなくても人は生まれればやがて死んでいく。永遠の自然の中で自分はなぜ死ななければならないのか。また意図しない病気や災害になぜ苦しまなければならないのか。ここに強大な自然に対する恐れと崇拜が生まれたのです。原始宗教はこのような自然に対する畏敬から発生したと考えられます。大木や巨石といった自然物、熊、鳥と言った動物、これらが自然の摂理をつかさどるものとして崇拜の対象になりました。それらの

対象が人間に移るとそれがシャーマニズムになり、宗教になります。自然崇拜とシャーマニズムの違いは「言葉」です。言葉が崇拜の対象となったときに宗教が生まれ、言葉が「こころ」を表現の対象にしたときに宗教が始まったのです。

「宗教」の定義は非常に難しいのですが、人間の力や自然の力を超えた存在を中心とする「概念」を元に教義、儀礼、施設、組織などをそなえた社会集団とでもしておきましょう。ということは人類が自然世界というものの中で自分たちの特殊性を認識し仲間をつくり社会というものが生まれた中で宗教というものが出てきたということが分ります。

ここまですでに「哲学」との対比でそれぞれを大胆に定義すると、「神話」は物語でありその論理の基本は「想像力」であり方法は「語り」による心地の良い「納得」です。そして「宗教」は「集団心理」であり、論理は「信仰」つまり、理屈なく信ずることに置き換わります。その方法は人間自身の根本を思い計って自然と通うずる体験を得ることです。それでは「哲学」はどうなのか。前二者と同じく、その対象は人間を含めた自然世界ですがやはり哲学は学問である以上、普遍的つまり誰でも何処でも理解、納得できるものでなくてはなりません。そのためには、説明の方法や言葉の扱いが問題となりま

す。一方、自然科学も人間を含めた自然の説明をするのですがそれはそれぞれをばらばらにして解釈します。例えば物理学は宇宙の法則、医学は人間の体の造りといったように。しかし哲学は人間と自然との関係を説明したり自然物を含めたその存在の意味を追求します。すなわち答えの見えないものを考える中で新たな問を作り出すことをしているのかもしれない。そもそも我々人間はすべてのことが分かってはいますが。想像するできないことは、考えることができないのです。といっても私にとつて「哲学」が何であるかはまだまだ考えていかねばならないし、「一仕事」済ませたとしても残された大きな課題です。さて、書き物が長くなつてしまいましたが「宗教」という事柄を扱った機会に現代の宗教問題について少しふれておきましょう。現在、中東などの国々で紛争を引き起こしているものに俗にイスラム過激派、しばしばイスラム原理主義とよばれているものがあります。そもそもこの原理主義というのは20世紀初頭の米国で起こったプロテスタント共同体の運動の名称であり現実の社会への適応を重視する自由主義神学と区別するために使われた言葉なのです。が。原理主義⇨ファンタメンタリズムといふのは教義を狭く解釈し改革や変革を認めず、時代性を考慮にいれず自らを厳

格に縛っているものです。宗教上、どちらが正当だという根拠ありません。そもそも教義というものはしばしば解釈の変更がなされています。キリスト教などもローマ法王のもと過去、幾多の宗教公会議が開催され、その時代背景のもと反対意見は異端となり残りが正統となっただけです。だから単純に原理主義＝悪ではないのです。

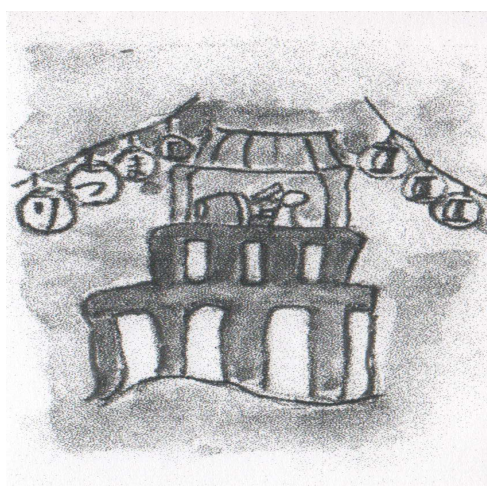
そしてまた現代のイスラム原理主義は自らの教義の解釈から生まれたのではないところに大なる特殊性があります。これが生まれた背景には現代社会の抱える差別と憎しみがあると思われまふ。

今日の世界はグローバル化という名の世界規模の資本主義、つまり高度な物質中心の金融資本主義が極度に発展した結果、資本の存在の有無による、つまり持っているものと持たざるものの格差が世界規模で拡大している状態です。イスラム過激派集団の中にはアラブ系の国々はもとより欧米各国の若者が増加していると聞きます。彼らは格差社会の自国で持たざるものとして底辺で生活する不満分子です。彼らが憎むのはこの高度に発達している物質文明であるというのはその立場からすれば容易に想像できます。彼らにとっては民主主義や男女同権さえもその憎むべき文明の一部となります。

この物質文明を否定して精神文明にそ

の活路を見出し、時代性を否定する原理主義に共感を求めるのはかつての世界宗教が対面してきた問題でもあります。そもそも宗教の本質は物質から精神への移行でもあります。そういう意味からも現代の宗教対立は単なる宗派上の争いや異宗教間の対立ではない。状況こそ違え、昨今の原子力発電問題も似たような構造です。将来起るであろう問題よりも現在の利便を優先させる。すなわち想像力や精神的な「こと」より現実の「もの」に価値を置く思考です。それが社会通念となり時代趨勢となっているのです。

「疎外」という言葉があります。人間が自分自身で創り出したものにこれだけ苦しんでいる時代はかつてなかったでしょう。今こそ、哲学はこの問題を問い、解明することでその存在意義の復権を果たせると信じています。



挨拶回り

明石 幸次郎

S工場の資材課での2年間の経験は、その前の本社資材部での5年間の経験とは比べものにならない位に明石は自分を鍛えてくれたような気がした。5年間居たこの本社資材部の和やかな雰囲気は、大企業の購買部門という買い手の立場がもたらす、余裕のようなものから発せられているのだと改めて感じた。

本社資材部とは違い、工場の資材は扱い部品に拠って仕事の内容、しんどさは違えど、毎日、部品を如何に安定供給し、それらの部品の品質を保ち、且つコストダウンという名目で如何に安く調達するかという仕事に追われながら、常に緊張感を持ちながら過ごして来た。

転勤1年目は担当した一部品が納期通りに納入されない状況が続き、何回かその部品が欠品して、製品が組めずにラインがストップするという、異常な事態を発生させてしまった。ラインを止めることは、工場資材マンとして絶対にやってはいけないことで、現場の作業長から、毎日のようにどなられたり、上司からも何度もその業者を他の業者に変えろと指示された。そんなことは、いくら経験がない明石でも百も承知のことで、さすれば、何処の業者に変えたら良いかと言う肝心なサジェスションはない上に、それ

を探すのはお前の仕事ではないかと、突き放された。問題が発生しても調達組織として対応することなく、その問題解決を一担当者の責任として済ましてしまうところがあつた。それは、目先の問題解決だけに追われ、本質的な問題解決を、時間をかけて図り、工場の体質強化を図ろうとしないS工場の仕事のやり方に問題があると、本社資材から転勤して間もない明石は感じた。

明石はこの問題を何とか自分で解決した時の喜びと、欠品の苦しみから逃れた解放感、本社資材マンでは絶対に経験出来ないことであつた。又、この時の問題解決から学び取ったことは、サラリーマンは、会社の名前の組織で仕事をしていることが多いが、それが通じない世界もあるということで、その時に、どうやって与えられた仕事の責任を果たすのか？

それは、仕事で何かあれば、お互いに助けたり、助けてもらったり出来るGIVE&TAKEの関係を日頃から社内外に意識的に作っておくことだと思った。“相身互う”それが、B級サラリーマンが組織の中で生き残る方策でもあると実感した。

そんな思いを感じながら、新入社員時代の5年間を過ごした資材一課の席に歩いて行った。明石が近づいていくと上司であつたM課長がにつこり笑って、「明石君、S工場での経験は、きつと今

度の輸出部の仕事にも役に立つよ。どこの国を担当することになったの？」

と行き成り、転勤のあいさつをする前に質問された。

社内には異動の告知が人事部から配布されるので、全社員が回覧で告知を見ることになっていた。明石の異動も事前に告知で知らされていたので、M課長も告知を見て知っていたのである。

「韓国、中国、インドシナ、スリランカ等です」と答えたら

「明石君に合う様な国やなあ」と言われたが、どう応えて良いか分からなかった。

「そうですか」と答えると。M課長の近くに座っていたTさん（私と入れ替わりに本社資材部にS工場から異動してきた）が

「S工場はどうやった？短かったなあ。

俺は新入社員から12年間一筋S工場購買部におったので、資材部門しか知らないが、今度は海外営業でエエなあ。輸出部はS工場と同じ事業本部なので、明石君は工場を経験して、その人を知っているだけでも、仕事がやり易くなるよ」と率直な感想を述べてくれた。その後、T副部長、N部長に挨拶してから、明石に挨拶の大切さを教えてくれた資材4課のS君の席に行つて

「今度、輸出部に異動となったので、又、飲みに行こう」と挨拶したら

「輸出部にN君がいませんか、アイツと

は同期なんです」

「そう、今度同じグループでN君に色々教えて貰うことになっているんやわ」

「そうですか、それは奇遇ですね。アイツとは結構仲が良いので、これを機会に一緒に飲みに行きましょう！」と久しぶりにS君と話をしたが、相変わらずノリの良い会話になる。N君は生粋の東京人で、S君は会社から歩いて15分の処に実家がある生粋の大阪人で、この二人が仲が良いのも面白いと感じて

「早速、アレンジするので3人で飲みに行こう」という話になった。大分時間が経ったので、輸出部のフロアーに戻るために資材部を後にした。

